

有島武郎・〈虚構〉の準備過程・再考(三)

——第一 札幌時代に関する精神史的研究の一部として——

栗田 廣美

* 本稿は、本紀要三六、三七号所載「有島武郎・〈虚構〉の準備過程・再考」¹⁾

(上)「同(二)」に引き続き、第一 札幌時代初期に於ける有島武郎の精神史的展開を考察するものである。また本稿は、本稿を含む「〈虚構〉の準備過程・再考」シリーズ全体を「最初の三分の一」とする、より大きな三部構成の論考(「目次」参照)の中に位置付けられるものである。

* 有島日記『観想録』引用の際の日付は、本文中に[D.1897.6.12]の如く記し、日付不明は「*」で示す。また引用文中の傍点・傍線等は、特記せぬ限り全て栗田による。

全体構想と目次

先稿発表までに、「〈虚構〉の準備過程」シリーズを含む、有島・第一 札幌時代考察の全体構想が見えてきた。先稿までの「見出し・節番号」を、次の「目次」のように(お詫びしつつ)変更したい。

I 「虚構」の準備過程——目次	
緒言 「虚構」の準備過程(二八九年三月まで)という区切り	……本シリーズ
1 問題の出发点——明治的近代の(インサイダー・優等生)	……先々稿1
a 渡札(D.1897)の問題	……先々稿2
b 優等生の英雄像——「農業革新ノ魁」	……先々稿3
2 「札幌」という空間	……先々稿4
a 非東京としての「札幌」	……同
b 「空間」の外部と内部——妹・愛子と農場	……先々稿5
3 「札幌」——思念深化の加速装置	……先稿1
a 「抵抗体」の不在——否定的媒介の措定	……先稿2 a
b 思念矢鋭化のモデル——カーライル『衣服哲学』	……先稿2 b
4 自他の批判と思念深化	……同
a 自己批判の始まり——「wonder」と「foundation」	……同
b 異質性認識の始まり——〈東京〉と〈札幌〉	……同
(i) 〈東京〉	……同
(ii) 〈札幌〉	……同
5 「空間」変容の兆しと思念深化	……本稿
a 「空間」変容の兆し	……同
b 記述スタイルの屈折——自己の孤絶性認識	……同
c 「逆転」の論理と装置(細目略)	……以下別稿予定
6 「真理探究盟約」と有島・森本閉鎖空間(細目略)	……本シリーズ以後の構想
II 「虚構」の成立過程	……同
III 「虚構的世界」の確立	……同

5 〈空間〉変容の兆しと思念深化

一八九七〔明治30〕年の秋から冬、有島は、一種高揚した気分の中にあったようだ。参禅は復活し、「真正ナル坐禅」〔先稿既出〕も経験され、遠友夜学校関係の記述も初出している〔D.1897.9.26.11.27〕。また、「湯地」〔海江田〕等の薩摩藩閥系人物名が日記に散見されることから、農場入手関係の手伝いもこまめに続けられていたと判断できるし、同時に、多くの友人たちと共に、定山溪や石狩河口に宿泊旅行もしており〔D.1897.10.6.7.10.23.24〕、实际行动も活発である。しかもその中で、『衣服哲学』を熱心に読みつづけていたことも確認できる〔D.1897.12.*〕。——有島自身も、「去月先ツ少シク意ニ充ツルガ如キ行為ヲナシヌ」〔D.1897.11.〕と充実感を表明している。

むろん屢々指摘されてきたように、森本厚吉と「萬障ヲ排シ真理ニ向ツテ歩ム」盟約〔D.1897.9.23〕別稿に詳述予定を結んだことが重要な契機だったことは確かだが、この時期の有島を、森本厚吉一色で塗りつぶすことは、不正確であるのみならず、その後の重要な変化を見逃すことになるだろう。事実、他の友人を含む行動の記録は、未だ生き生きと続いていた。

東京から戻った有島は、むしろ全体として、活発な生活を送っており、いわば彼の〈空間〉全体が活性化していたと見るべきだろう。日記に記述された〈有島の世界〉は、未だ、広がりを見失っていないのである。——(1)では、

「[a] まず、森本を相対化しつつ、有島の〈空間〉全体の広がり、その内部の微妙な変化を確認し、

「[b] 次に、従来見過ごされてきた日記の重大な変化——日記記述スタイルの屈折の始まりを見ておきたい。

本論に森本厚吉を登場させるのは、この屈折を考察した後（別稿予定）のことである。

a 〈空間〉変容の兆し

瀬沼茂樹氏は、〔この年は武郎の身にとって重要なことがいくつかあった〕として、一八九七〔明治30〕年秋に起こった三つの出来事を挙げている。

一つは新渡戸稲造の離札〔897.10.5—病氣療養のため退任、鎌倉に転地〕。

一つは父・武による「農場入手」の報〔D.1897.11.3〕——実際には出願すら翌年四・五月であり、「借地出来タル」云々は有島の早急案だろう。

一つは森本厚吉の本格的登場〔D.1897.9.23〕である。

このうち「農場入手の報」は、日記〔D.1897.11.3〕を見る限り、内面化された出来事にはなっていない。この後も曲折を続けることになる農場入手事業とその戦略は、有島の〈空間〉の外側にあったからである〔先々稿参照〕。確かに有島は感激しているが、〈空間〉の外側への視線を持たぬ有島自身にとって、その目に映る農場入手工作は、所詮「父上ガ余ノ為メニ贈ヒシ所」〔D.1897.11.3〕でしかなく、したがって、既存

の「家―父」像を強化するだけで、新たな精神史的問題を提起しないからである。――たとえ「客観的」に重要なことであっても、それが「空間」に入って来なければ、精神史にとつては意味を持たないのだ。農場問題は、やがて「重圧」になることで初めて内面的意味を持つことになるだろう。

これに対して、新渡戸稲造の離札は、重要な意味を持っていた。

功利主義的・出世主義的な生き方を否定し、理想主義的ヒロイズムを純化しようとしていた「超優等生・有島」にとつて、第一札幌時代初期に於ける新渡戸稲造は、まさに適師だった。――『衣服哲学』からのインスパイアはもちろん、坐禅の精神的深化にさえも、新渡戸の指導という契機が重要な役割を果たしており、思念深化を進める有島にとつて、新渡戸は「適師すぎるほどの適師」だったと言える。

だが他方に於いて、新渡戸は、何と言つても父親代わりに有島を監督し、真理探究のための「修身」(D.1897.10.3)を奨めても(それが決して度外れにならず)あくまでも「修身」にとどまるよう「タガを締める」立場にいたはずである。カーライル『衣服哲学』を講じつつ、同時に「甚ダ其危峻ナル」(D.1898.3.13 先稿既出)側面への注意も忘れぬ態度、「余ハ決シテ主戦者ニアラズ」と言いながら、同時に「各国兵アル間ハ寧ろ強固ナル兵力」が必要だと言ひ、野津大将を「日本歴史上二不朽タル可キ巨人」(D.1897.5.29)と謳つ態度、こつした、いかにも「監督者」にふさわしい「バランス感覚」こそ、(内村鑑三とは対照的な)新渡戸

の持ち味だったと言える。

――その新渡戸が有島の「空間」から去って行つたことは、ある意味では、有島を守っていたタガが外れることを意味していた。新渡戸の離札は、つまり、有島の思念深化が以後「度外れ」になり、その「空間」が「外部の日常性」と断絶していくための外的条件になったのである。監督者・新渡戸稲造はいなくなり、その「師」としての位置は、やがて、「激侠」性に満ちた内村鑑三が占めるようになるのである。

瀬沼氏の指摘の第三点、森本厚吉の本格的登場は特に重要であり、極力厳密に考える必要がある。「森本登場」そのものについては別に論ずるが(別稿予定)、ここでは前提的に、以下の二点を確認しておきたい。

第一は、有島の交友圏が(少なくとも)「虚構」の準備過程」に於いては)かなりの広がりを持っていたこと、つまり、決して「森本一色」ではなかった事実であり、

第二は、その交遊圏内部の微妙な変化、つまり、一八九七年秋以後に見られる「伊藤清蔵―松平恒雄」の後退と「森本厚吉―増田英一」の進出の問題である。

【有島交友圏の広がり】

一八九七(明治30)年秋に於ける「森本厚吉の本格的登場」は事実だが、それは決して突然起こったことでもなく、また、森本の「どうしても有島とつきあいたい」という強引でしかも哀切な(西垣勤氏⁶⁾行動に

よって引き起こされた椿事、などでもない。こうした記述は不正確であり、同時に、以後の「自殺未遂→キリスト教入信」という精神のドラマに関する、従来の研究史に通有の傾向——森本厚吉の「イニシアティブ」や「真摯な余りにやや強引」〔安川定男氏⁷⁾〕な態度を過度に強調し、結局は、有島の「主体的でない姿」〔西垣勤氏⁸⁾〕を描き出してしまふ傾向——の前提論になるだろう。

それだけではない。この傾向は、実は、有島自身による回想『リビングストーン伝・第四版序言』に端を発しているのだが〔別稿に詳述予定〕、そこに描かれた有島の自画像——森本の登場までは「友達といふ友達も」持たなかった孤独な自画像——も、にわかには信じ難いのである。後に見るように、有島による自己の孤独性の強調には、「森本登場」を劇的に描出するための戦略的配慮が感じられるからである。自らを孤独な姿で描き出した『リビングストーン伝・第四版序言』という回想は、離教の経緯を説明するという明確な意図を持った、極めて政治的な文書であり、それを（一定の操作を経ずに）有島青年期研究の基本資料とすることは出来ないのである。

森本登場の経緯自体については別稿に譲るが、今、ここで確認しておきたいことは、『リビングストーン伝・第四版序言』に於ける有島自身の証言にもかかわらず、（今までも折に触れて指摘してきたように）第一札幌時代初期の交友圏が、かなりの広がりを持っていたことである。

このことを、稿末の《表1》、《表2》に沿って確認したい。

《表1》は、『観想録』開始以後、「虚構」の準備過程⁹⁾が終了する一八九八（明治31）年三月までに、日記に記録された交友圏の推移——つまり、（回想ではなく）当時の有島によって「記録する必要あり」と判断され、意識化された交友圏の推移を整理したものである。

一見して分かるように、有島は〔記録の無い編入学直後はともあれ〕、決して、本人が言うような、「友達」の無い「淋しい」日常を送っていたわけではない。「友人名が多いから孤独ではない」などと単純に言いたいのではなく、友人との共同行動（語らい、散歩、ハイキング等々）を記録する日記執筆当時の有島は、決して、自らを「友達といふ友達も」無い孤独な存在とは意識していなかった、と言いたいのである。——

《表1》の資料母体は、当時の学生名簿¹⁰⁾によって直接確認できる級友名が明記された日記記事¹¹⁾だけ¹²⁾のだが、それだけでも、友人名は、本科一年級の学生四十二名（有島自身を除く）中、約半数の十九名に上っている。少なくとも日記を執筆し、自己の行動を確認する際の有島の意識は、同級生の半数近くとの繋がりの中に広がっており、さらにこれ以外にも、名前が明記されぬ友人との共同行動は多々記録されているのである。これは、「有島が密室で完全な虚構¹³⁾日記体小説を書きつづけていた」とでも思わぬ限り、交友圏の広がり無しには考えられぬことである。

《表2》は、同じ時期の日記に記録された（つまり《表1》と同じ意味を持つ）文通記録を整理したものである。《表1》と同様、有島

は広がりのある文通を続けていたし、「〈虚構〉の準備過程」終了までは、その文通を記録することを「意味のあること」だと意識していたはずである。

《表1》、《表2》から言えることは、「〈虚構〉の準備過程」が終了する一八九八(明治31)年三月前後まで、有島の精神がかなり広い交遊圏に繋がっていたこと、つまり、彼の〈世界—空間〉が、未だ、基本的には、多数の学友たちを含み、広がりを持っていたことを示している。

「日常性内部での優等生」の後退

しかし、一八九七(明治30)年秋以後に於いて、この〈空間〉内部に微妙な変化が起こっていた可能性も見ておかねばならぬだろう。

——以下は、極めて僅かな手掛かりしか存在せぬ中での「可能性」の推測である。

まず、《表1》の森本厚吉と伊藤清蔵に注目したい。

夏休み前から、「Foundation固キ」森本と、「千歳ノ金言」を語る伊藤とは、有島の憧れと尊敬の対象だった。二人の名は単に多出するのみならず、特に一年以上級の伊藤清蔵は、日常行動を記す際に現れる他の人名とは異なった場面で現れることが多かった(なお「木村徳蔵」も多出しているが、これは彼が、新渡戸稲造の離札後、有島と同居することになった事情によっており、二人とは区別せねばならぬ——D:1897.10.8)。

夏休み前、二人の中では伊藤清蔵が優位に立っていた。日記登場回数は対等ながら、記述量の面からも内容からも(D:1897.5.22, 6.10)、伊藤清蔵が、森本厚吉を凌ぐ憧れの対象だったことは確かである。——ところが夏休み後になると、二人の関係は逆転し、圧倒的に森本が優位に立つのである。

この伊藤清蔵は、《表2》に見える松平恒雄(在東京・第一高等学校在校生)によって、有島に紹介されていた(D:1897.5.22)——松平も一高での友人を介して間接的に伊藤を知っていた。そして、その松平恒雄も、夏休み後になると文通記録の中で後退し、増田英一が優位に立つのである。

多くの友人たちとの交友は引き続いているのだが、その中で目立っていた(おそらく特別に魅力のあった)四人の友人が、「伊藤清蔵—松平恒雄」の後退と「森本厚吉—増田英一」の進出という形で、絞られているのである。

「伊藤—松平組」と「森本—増田組」には、一種、質的な相違があった可能性がある。

「伊藤—松平組」——伊藤清蔵と松平恒雄は、思念の屈折を見せぬ「日常性内部での優等生」だったのではないだろうか。

伊藤は一年以上級の首席であり、有島は彼の「学徳」にも「覚悟」(先稿既出)にも敬服していた。有島は一八九六(明治29)年に入学して以来、伊藤を見かける度に「何トハナキ恭謙ノ貴容ニ打タレ唯慕ハシキ心地シテ」(D:1897.5.22)挨拶していたと記しているし、その後伊藤が「首席」

だと聞いて「尊敬ノ念」を加えたと述べている。丘に登って「雲雀ノ声遙カニ聞ヘ」る中、ドイツ語の詩を朗唱する伊藤清蔵を描く有島の筆致〔D.1897.6.10〕は、憧れに満ちたものである。しかし、その伊藤清蔵の（記録された）発言は、極めて常識的なものであり〔D.1897.5.22—先稿参照〕、思念の屈折せぬ「日常性内部での優等生」を想定し得るのである。

——実際、伊藤清蔵の履歴を後年まで追求めていくと、一九〇〇年には首席のまま卒業して直ちに、農学校助教教授に就任、その後文部省からドイツ留学を命ぜられ、帰国後は（今日でも）日本に於ける農業経営学の草分け的存在とされるほどの学問的レベルに達していた。同時に、現実的理想主義者としてアルゼンチンに大農場を経営した人物でもある（後掲補足参照）。

その伊藤を有島に紹介した《表2》の松平恒雄に関しても、ある程度の履歴は分かる。——松平恒雄は、学習院中等科から一高、東大に進み、後に駐米・駐英大使、外務省欧米局長等を歴任し、ロンドン軍縮会議では首席全権を勤めるなど、（学習院出身者としては吉田茂と並んで）日本外交史に名を残すことになる人物であった。この当時は一高在校中で、夏休みには、三浦半島大津での一高生の合宿に、有島を（壬生馬ともども）招いている〔D.1897.8.2-8〕。一般的な「学習院学生」とは違う魅力があったのだろうが、有島に描かれた姿〔同〕には全く屈折が無く、やはり（あくまでも可能性の推測ではあるが）覇気に満ち

た「日常性内部での優等生」だったように想像される。

ところが、森本厚吉と増田英一は違っていた。

同じように敬意を抱く親友ではあっても、彼ら二人には、「伊藤—松平組」の如き「日常性内部での優等生」像を想定しにくいのである。

森本厚吉は、伊藤清蔵とは対照的に、前年度の成績は学年で最下位だった。卒業時の成績は十一位に上っているので、一応は、当時「退学」まで考えていたという本人の言〔D.1898.3.8〕にしたがって「信仰上の悩み」ゆえの不振と考えて良いかもしれぬ。いずれにせよ彼は、決して日常性内部での優等生とは言えない。——同様に、文通の主たる相手になった増田英一は、悲恋の中で、やがて高等商業学校を退学し、京都へ、アメリカへ、中国大陸へと続くことになる放浪の歩みを始めようとしているのである。

当時の有島が「伊藤—松平組」を徐々に離れ、その深い繋がりの手を「森本厚吉—増田英一」に絞りはじめていたことにはそれなりの理由があるだろう。この変化の背後には、学習院批判から「学芸会大会」での学生演説批判に続く、同時代青年との異質性認識の進展があったはずである。成績優秀で覇気に満ちた「いわゆる優等生」よりも、むしろ、そういう優等生とは際立った対照性を感じさせたはずの「森本—増田組」の方に、この段階での有島は「思想的な深み」を感じたのではなからうか。——交友圏の広がり、は維持されていたが、その内

部で、微妙な変化が起こつていたことが推測されるのである。

新渡戸稲造の離札によつて、「タガII安全装置」が外されていた、有島の〈空間〉は、その内部でも変化を引き起こしつつ、いよいよ「虚構」の準備過程」終了の段階へと進むのである。

〔補足・伊藤清蔵に関して〕 伊藤清蔵には『農業経営学』⁽¹⁰⁾という著書があり復刻版も出版されている〔復刻版には、札幌農学校時代に、有島とともに撮影した写真も掲載されている〕。この著書と、復刻版出版に際して金沢夏樹氏⁽¹¹⁾が加えた「解題」、及び併録されている自筆年譜〔自伝「南米に農牧二十年」⁽¹²⁾からの転載〕から、次のような略歴が分かる。——①一八七五年・山形県谷地町字北口に生まれ、②一八九二年・札幌農学校予科に入学〔本科進級後、一八九六年に入学してきた有島と知り合い〕、③一九〇〇年・同校本科を首席で卒業、直ちに同校助教授任になり、翌一九〇一年には最初の著書『農業金融論』⁽¹³⁾を出版、④一九〇三―一九〇六年・文部省海外留学生としてドイツに渡りボン大学等に学ぶ。⑤一九〇六―一九〇九年・盛岡高等農林学校教授（農学博士）、『農業経営論』を出版。⑥一九一〇年・ドイツ時代に知り合った妻とアルゼンチンに渡つて大農場（牛七、五〇〇頭、羊三、二〇〇頭）というを生経営し、⑦一九四一年・アルゼンチンの農場で死去。

金沢氏によれば、伊藤清蔵は日本の農業経営学の草分け的存在であり、学問は、斯界の世界的権威ゴルツ（ドイツ）を受け継ぐものとされる。内田真木氏は、すでに、このゴルツを継承した伊藤清蔵の農業経営学思想と、有島武郎との関連を論じているが、この内田氏、金沢氏の考察や伊藤自身の『農業経営学』から感じられるものは、理想主義的でありながらも、あくまでも常識に根ざした「現実対

応」を、忘れない態度である。

b 記述スタイルの屈折——自己の孤絶性認識へ

学習院批判〔先稿参照〕に最初の露頭を見せた「他者との異質性」の実感は、札幌にも跳ね返り、継続され、微妙な形ではあるが、その〈空間〉の質を変容させはじめていた。交友圏の広がりは未だ維持されていたが、しかし、特に一九九七〔明治30〕年の年末以後、日記は急激に間遠になり、書簡の授受記録も書かれなくなり、次第に、有島が意味を感じる交友の相手は、森本厚吉（書簡では増田英一）に絞られはじめるのである。——これが、一九九七〔明治30〕年末から翌年初頭にかけての基本的な傾向である。

この傾向が明確な形で現れたのが、一九九八〔明治31〕年二月二十五日の日記である。本節では、その最初の部分について考えたい。

嗚呼余ハ血氣勃々トシテ希望^ヲ堵ノ如ク己レヲ信スル最モ厚キ青年壯者ガ劈頭第一ニ厭避スル宗教ノ必要ヲ益信ジヌ。余モ青年ナリ。壯者ナリ。血氣勃々タル可キモノナリ。希望^ヲ堵ノ如カル可キモノナリ。己レヲ信スル最モ厚カル可キモノナリ。而シテ自ラ喜テ指ヲ宗教ノ問題ニ染メ、所謂血氣ヲ抑制セントシ、所謂希望ヲ放抛セントシ、求メテ己レノ至ッテ無力ナルヲ確信セントス。嗚呼寧口人ハ余ヲ指シテ何トカ云ハン。（……）（1906.2.25）「教」を「勃」に改めたこの「宗教」が、もはや「参禅」を意味していないことは明らかだ

が「参拝記録は前年十二月三日が最後。この年二月七日に出向いてはいるが休講、未だ、具体的に「キリスト教」を意味しているわけでもない。へ真理探究」と、ほぼ同義だと見てよいだろう。——しかし、ここで最も大切なことは「宗教」の意味などではなく、この日記の文章の調子に現れている「精神の在り方」の、ある重要な変化である。有島は、優等生性を純化し、ますます強く「真理探究」を志し、つまり「宗教ノ必要ヲ益信ジ」ように決意しているのだが、その決意の仕方が変化しているのである。

有島の決意というのは、何よりも「青年壯者ガ劈頭第一ニ厭避スル」ものに敢えて飛び込む、という決意である。「青年壯者」と自分とは、すでに、根本的に違っている。「青年壯者」が何よりも「厭避」するものの中に——にもかかわらず、止むに止まれず、しかも喜んで——自分は飛び込まずにはいられぬものを持っているのだ、というのが、文の骨子である。

冒頭の「血氣勃々トシテ希望^{マヤ}堵^{マヤ}ノ如ク」は、「己レヲ信スル最モ厚キ」とともに「青年壯者」を修飾する。だとすれば、有島は、その反対なのだ。「血氣」「希望」「自信」といった、かつて（九か月前）の自己の信念そのものを、有島はすでに突き放し、縁遠きものとして見ている。「余モ青年ナリ。壯者ナリ」としながら、にもかかわらず、彼は、他の同時代「青年壯者」流とは違って、「所謂血氣」「所謂希望」を「求め、テ」放抛しようとするのである。

この屈折した論理は、ここだけの偶発事ではない。この日記を最初、の現れとして、以後、自殺未遂事件に到るまで、否、以後の第一札幌時代全体を通して見ることが出来る論理である。

我々はここに、有島の、へ他者との異質性認識への質的深化を見なければならぬ。——それは、（前年五月の「当今ノ書生」批判（先稿既出・D180758）に於けるような）同時代青年の「小望」批判から、「望」自体の批判への深化である。

「直面直往死シテ後止ム」（同）と記していた時点の有島は「大望」優等生であり、批判は「小望」優等生に對してのものだった。しかし、「所謂希望」自体を「放抛」する、と言う有島は、すでに、「望」の本質に於いて、自己と他者を峻別するようになっていと言えよう。

「嗚呼寧口ハ、余ヲ指シテ何ト云ハ、ン」——この日の日記には、以前とは明らかに異なった、一つの記述スタイルが出現している。直面直往、意氣盛んに理想を吐き、他を批判していたかつての姿勢は単純にして明朗健全、「明治書生風」であって、要するに日常性の中の記述スタイルであった。が、この日の日記の記述スタイルは、奇妙に屈折している。自分を「変人」として見る目が、即ち、表面上は一般的「青年壯者」の方が自分より「まっとう」だとして、自分を「下位」に置く発想がある。

これは単なる謙遜でも、むしろ劣等感でもない。——それは、「仮装」というものである。記述スタイルの屈折自体によって自己表現しよう

とする、仮装のスタイルである。内面での自信に深く支えられながら、しかもその自信が、他の所謂「血気」に満ちた青年たちの「自信」とは質的に異なっていると確信している、そうしたレベルでの「他者」との異質性認識こそ、以後のドラマを成立させる前提であろう。

——有島は、札幌での一年半を通して優等生性を純化し、インサイダー的な「大望」青年から「望」自体＝精神の在り方自体の違いの認識に到達した。しかもそれは、単なる違いではなく、自らを「変人」だと外界に対して仮装する、（そのようにしか自己表現できない）孤絶性認識のトバ口に立つことでもあった。

○

以上に述べたことを、「〈虚構〉の準備過程」全体の流れの中に位置づけつつ纏めておきたい。

① このようにして「他者（同時代青年）批判—異質性認識」は、一八九七（明治30）年から翌年初頭の時期に、有島の「優等生性純化」の中で深化した。有島を囲んでいた多くの同時代青年たちは、有島の孤絶性認識の中で、彼の精神にとつての意味、つまり「他者」たるに必要な緊張関係を失い、やがて彼の「空間」そのものから放逐されてしまうのである。——以後の日記に於いて「同時代青年批判」は後景に退き、同時代青年批判が果たしていた「思念深化のための否定的媒介」としての役割は、観念の中で、より一般化された「世間」

全体に広がっていく。それと結合して、「森本厚吉—キリスト教」が、本格的に登場することになるのである。

② 同時に、有島の日記記述スタイル（精神構造の表出）は屈折し、やがて「日記に記述される世界」は、外部の日常性と断絶するようになっていく。日常性の日光は、有島の精神の底にまでは差し込んで来なくなるのである。日常性の光線によって殺菌されてしまわない淵の奥で、「虚構」が準備されていく。

《表1》 第一札幌時代初期の交友関係 (日記に出てくる友人名：『札幌農学校一覽』所載同級生名、等)

〔凡例〕 ○印＝日記に名前が出ている者の内、伊藤清蔵、河野孝太（「孝夫」は除外した）以外は、有島と同じ（1897年秋以後）本科1年級の同級生に絞った。同級生名の確認は、『札幌農学校一覧』（1897年度をカバーするもの）による。
△印＝話題言及。×印＝死後の言及。？印＝同性者で姓のみ記載。※印＝「仲田」も「中田」と見なす。
なお「森元」は有島の誤記で「森本」。木村徳蔵は新渡戸離札幌後（1897.10.8）同居。星野純逸は1898.1.15死去。

年月日	森本〔増山〕厚吉	伊藤清蔵	木村徳蔵	星野純逸	星野勇三	半沢洵	蛸崎知次郎	鈴木真吉	鈴木敬策	井街顕	中田重勇	河野孝太	その他	備考
1897. 5. 2				?	?									「星野」のみ
16			○						○					
21	増山来談													
22		来談												伊藤：長文記事
30	増山	来談	○			○	○	○					羽山、	
31										○				
1897. 6. 9													原田、幹	
10		山に												
11			○											
14						○							佐藤、瀧（臣?）	
15	訪増山談話	言及				○								
19	訪増山談話													
20							○							
21	訪増山												渡辺、佐藤	
22	訪増山	来散歩						○						
23	増山							○						
27		訪暇乞						?					原田	離札暇乞い
28					○					○			早川萬一、瀧臣	4名と共に離札
夏休み 帰京														
1897. 9. 22														池、野呂不品行の噂
23	増山来													真理探究盟約
25	増山（皆と）		○			○								
26	増山（皆と）		○			○								貧民学校→真駒内
27	森元と散歩													
1897. 10. 1			○											
2														管・西垣演説
3	訪増山・不在・増山来													
5				○				○	○	○			原田、	皆で農家へ
6	増山（皆と）							?	?		○		石沢	皆で一泊遠足
7								?	?		○		石沢、東海林	同
8			○											
10				○	○								早川萬一	3名特待生祝賀会
15				△										
17	訪増山（皆と）		○									○		木村、孝太と円山に
19			○									○		
20			○											
23	増山（皆と軽川行）					○	○	○			○	○	佐藤正二郎	皆で一泊旅行
28	増山来・長話													
30		来長話												
31	増山来・長話													
1897. 11. 11					○									
14	森元（昼・夜）											○		
20	増山来		○											
23		来	○				○							
27	増山													
28	森元来（写真）													
30												○		
1897. 12. 5	増山（写真）		○											
8			○			○								
歳末	森元兄ニ満腔ノ謝意													
1898. 1. 1			○									○		
2							○				○※			新年会
4	森元（入院見舞い）	来見舞	○											三人毎日のように
(15)				×	○									星野純逸死去
26				×										星野純逸追悼会
1898. 2. 2				×										
6	森元		○			○								
8					○									
1898. 3. 8	増山・一大秘密													
13	互増山厚吉書													

《表2》 第一札幌時代初期の書簡・受信発信記録状況（日記に記録されたもの）

【凡例】 1897～8（明治30～31）年の、日記に記された発信・受信状況を整理した。但し、夏休みの帰京中は無視する。
「受信・発信」欄の数字が、各月の日付を示す。なお、1898（明治31）年の受信発信記録は下表のものが全てである。
松平恒雄の欄の「*」は伊藤清蔵を紹介した書簡。「**」は「松平」のみの記載（前後から恒雄と推定）。
太＝太陽、学＝学会雑誌、尚＝尚志会雑誌、校＝校友会雑誌、日＝日章会雑誌、写＝写真 ……それぞれの送付を示す。
「壬」は壬生馬。「愛」は愛子 ※＝父上安着。※※＝湯地からの土地の件報告。☆＝祖母より「一心」。☆☆＝農場入手感動。

1897年 明治30年	4月	5月	6月 (→28帰京まで)	9月 (22帰札以後→)	10月	11月	12月	1898年 明治31年
増田英一	受信 30.	12. 24.	5. 8. 19.		2. 14.	28.		2/4
松平恒雄	受信 26.	4. 12. 17.	3. 12.	29.	14.	18.		2/4
松平保男	受信 26.	7. 22* 27字	4.	3.				
二條 (支英)	受信 26.	9. 22** 27字		1.				
箕? (箕田)	受信 26.	20.						
恩地 剛太郎	受信 26.	21.						
その他	受信 26.	22. 27尚	9. 20.		13.	2 尚		2/8
	受信 26.	5. 19. 27学	12 写		14.			2/1
	受信 26.	14.			3. 写	15.		
	受信 26.					23.		
	受信 26.	31.	20.	29.				
	受信 26.	30.	26.					
	受信 26.	26 水野直	17 佐野		2 上野	15 水野		2/3 水野
	受信 26.	26 永井直厚	21 輔仁会雑誌		13 杉田一貫	19 菊地/写		
	受信 26.	29 菊地正雄	21. 27. 永井直厚		19 吉田熊次	26 中川/日		
	受信 26.	30 南郷	26 大島先生					
	受信 26.	30 水野直	18 佐野	29 吉田熊次	3. 大関/写	12 新渡戸稲造	7 押小路	2/8 水野
	受信 26.		20 有島健助		3 有島健助	12 赤松		
	受信 26.				3 菊地正雄			
	受信 26.				3 杉田一貫			
家	受信 26.	9. 16 太. 24. 29. 写.	4. ? 6. 太. 15. 太.	28※. 29 母祖母☆	8. 愛	3. ☆☆ 14 父. 23 壬.	7 父	
	受信 26.	2. 愛. 5. 7. 18. 20 壬. 30.	12. 17. 26.	29.	3 写 25※※	1. 15 父. 23 壬.		2/1 2/8

注

1 この稿提出（一九九九年二月）後の考察進展により全体構想が拡大したので、標題の「上」を「二」に改めたい。先稿（本紀要37号）の「注1」でも述べておいた。

2 ①有島武郎・第一札幌時代初期の精神史的展開を、「虚構」の準備過程（本シリーズに属する数本の稿で追っている）、「虚構」の成立過程、「虚構的世界」の確立」という三つの過程の総体として把握しようとする構想である。②なお、この三過程からなる第一札幌時代考察全体を、「前半」とし、引き続きアメリカ時代考察を「後半」とする構想が、筆者の「有島青年期の精神史的研究」の全体像であり、③更にこの「青年期の精神史的研究」全体を、ヨーロッパ滞在・帰国直後の時期から始まる（比較文学・比較文化的研究を含む）有島の文学的・思想的研究に繋げていくことが、筆者の、当面の中心的研究課題である。——なお、本稿を含む「虚構」の準備過程・再考」シリーズは、拙稿（栗田弘美名）「有島武郎・「虚構」の準備過程」（一九七八・三、鹿児島短期大学「研究紀要」21号）の全面的再考察であるとともに、シリーズ全体が、学位請求論文『有島武郎研究——青年期の精神史的展開を軸として——』（二〇〇〇年七月、東京都立大学に提出）の最初の八分の一ほどに相当している。同論文の前半部を（全体的展望と流れを重視して）纏め直し、新たに書き下ろした著書を近く刊行する予定であり、今後、本シリーズは、より微細な考証と先行研究への実証的批判を重視した補論的考察に重点を移したい。

3 高山亮二氏の『新訂有島武郎研究——農場解放の理想と現実』（一九八四・四、明治書院）によって判断した。

4 瀬沼茂樹「有島武郎伝・3」楡の木陰——札幌農学校時代」（一九六三・一一、「文芸」）。

5 山田昭夫氏も、有島精神史の外的条件として新渡戸離札を重視しており、『有島

- 6 西垣勤「過去をどうみつめるか」〔有島武郎論、一九七・六、有精堂〕。
 - 7 安川定男『有島武郎論』(一九六七・二、明治書院)。
 - 8 一八九七(明治30)年版『札幌農学校一覽』所載の学生名簿。
 - 9 高梨正樹「学習院 華族の子弟教育」(一九九三・二、「歴史読本」、新人物往来社)。
 - 10 伊藤清蔵『農業経営学』(一九〇九・四、丸山舎書籍部)。
 - 11 近藤康男編『明治大正農政経済名著集8・農業経営学 伊藤清蔵』(一九七六・四、農山漁村文化協会)。白梅学園短期大学教授(経済学) 富永静枝氏から御教示を得た。
 - 12 伊藤清蔵『南米に農牧三十年』(一九五六、宮越太陽堂出版〔注〕書中の金沢夏樹氏「解題」による。筆者未見・没後の出版か)。
 - 13 伊藤清蔵著・佐藤昌介関『農業金融論』(一九〇一、裳華房〔注〕書中の金沢夏樹氏「解題」による。筆者未見)。
 - 14 内田真木「北海道型地主としての有島武郎」〔新妻、男・内田司編著『都市・農村関係の地域社会論』中第7章、二〇〇〇・四、創風社〕。
- * 有島武郎の著述の引用は筑摩書房版『有島武郎全集』(初版第一刷)により、旧漢字は原則として新字体に改めた。

くりた ひろみ (日本近代文学・比較文学・比較文化)